

絶望者の王国

羅美は怒っていた。聖母のような表情を陰しく一変させていた。容貌が秀麗なだけに一度殺気を帯びると、表情は凄絶なものになる。怒気の顕わになった眼光は、ナイフより鋭く心の奥まで刺し通す。雷さえ尻尾を巻いて逃げ出し、軟弱な人ならば簡単に打ち据えられてしまうだろう。魂さえ持っていかれかねない。

「そんなふくれ面をするものじゃない。折角の美貌が形無しだよ」

最初、望琉は事態の重大性を認識しておらず、すさまじい圧迫感に耐えつつも、気楽に流していた。それでも唇を笑う形に動かすのにかなりの努力が必要だった。

「そう怒るな。怒らないでくれ」

しかし羅美は本気だった。苛烈なエネルギーが秀麗な表情を打ち消すように噴出し、美しい唇は、わなわたと震え、言葉の矢が次々と繰り出される。矢は一ミリグラムの容赦もなく、望琉の心の奥底に突き刺さり、胸をかきむしる。

望琉は呆然とした。砲兵の射撃のように正確に計算された猛攻に打ちひしがれ、いまや答えるすべも知らず、頭がまるで働かなくなっていた。そして望琉が最も恐れていた言葉が遂に発せられた。

「出ていけ！」

どうしてこんなに美しい唇から、これほど残酷な言葉が出されるのか不思議だったが、考えている余裕はなかった。望琉はすぐに羅美の足元にひれ伏して、叫んだ。

「許してください」

声は裏返り、涙声の哀願に近かったが、そんな自分を卑しいとは思わなかった。自己の非を認めて相手の前に跪くなら、それは卑しい真似ではありえない。

「羅美は私の唯一の慰め、たった一つの憩いなのです」

それでも羅美はいつものように笑って許してくれなかった。望琉の惨めな狼狽など気にもとめなかった。望琉を引きずって家から追い出してしまった。二人の愛の巣から。

望琉は戸口に立っていた。戸口をじっと見つめていた。瞳には表情がなく、ただ、事象をあるがままに映し出しているようであった。

望琉はそこに何時間も立ちつくした。羅美が許してくれるという甘い期待を抱いて。羅美が許してくれるならば、女主人に対する下僕のような関係でもよかった。しかしそれは期待というより一方的な希望に過ぎなかった。

羅美は大人の女性である。思いつきで行動したり、一度決心したことを簡単に翻したりする、いい加減な人間ではない。簡単に撤回するはずがなかった。最早羅美にとって、望琉は単に一つの思い出に過ぎず、現実の男性ではないのだろうか。それならば望琉はどうすればいいのだろうか。

望琉にとって羅美は光だった。この地球始まって以来休まず東から登り西へ沈む太陽の光とも、電気エネルギーが発する光とも質の違う、人を癒す光。オーラと呼ばれたり、霊光と呼ばれたりもする。堅い意志をもち、内なる炎に燃えている。それは燃料を必要とする火ではなく、それ自身が燃える火である。四方八方に宝石箱を覆したような光彩を放つ。その目も眩むような明るさに、あらゆる一切の光明は消えてしまい、周りのもの全てが真っ黒なピロードで覆われてしまう。

光をまともに見ることは誰にでもできる芸当ではなかった。それでも望琉は仰ぎ見た。光の中心にいたのは 汚れ無き博愛の天使...一見すると小柄な少女とも見える。その存在そのものが、注目を要求する自然の力だった。その姿から目を伏せるだけでも意志の力を総動員しなければならなかった。

不安と絶望の日々の中で不意に現れた天使が羅美だった。羅美はこの世のものでないものを映し出す鏡である。未知の世界を次々と浮かび上がらせて望琉に見せ付ける。望琉は、ただ見とれるだけであった。まっすぐな瞳がまぶしかった。眼差しだけでなく、真剣に他人と向き合おうとする、その心がまぶしかった。

その時、望琉の心はまだ崇拜心とは別の場所にあった。しかし、羅美が望琉の中で崇拜の対象へと変化を遂げるまでに要した時間はほんの僅かだった。否、もしかすると初めて拝見した時から崇拜は始まっていたのかもしれない。羅美への信仰心に対しては、どんなに戦ってみても無駄であった。どんどん大きくなり、望琉をすっかりつかんでしまった。

天使の歌声、快活な笑い声、微笑み、博愛の精神、小柄なお姿、愛らしいお姿、そして祝福。望琉を見つめる眼差しには若々しく素直な光が宿っていた。軽い気持ちでチョッカイを出せるような存在ではなかった。それどころか望琉の中には知らず知らずの内に崇拜心が芽生えていった。羅美を見て、声を聞いた瞬間から愛さずにはいられなかった。幸福を振りまく為に遣わされた存在だった。

一緒にいるだけで魂が浄化される。そこにいるだけで日々を乗り越えることができる。心も体もその足元に投げ出してしまふ。そしていつしか生きさせて頂いている望琉がいた。これで望琉は生きていける、自分の人生を信じることができると思うことができた。望琉の意思や靈感の全ては羅美の目の中から湧いてくるように思えた。羅美と一緒にならば何でもできる。そんな予感がし、全身に力がみなぎった。

羅美に会う以前にも、望琉は恋愛をしたことはあった。しかし、それは会わなくなれば気持ちが薄れる、という程度のものであった。羅美との経験はそれまでのものとは全く違っていた。

急流に引かれるように互いの中にのめり込んでいった。それでいて心穏やかな日々には救われるばかりであった。もっと深く相手を知りたいと思った。相手の中に埋もれている自分自身を知りたかったのかもしれない。相手の存在によってそれぞれが輝いていた。勝利とか敗北とかは二人の間にはなかった。二人は常に同じ側にいた。二人の間には見えざ

る紐帯が確かに存在した。

羅美との生活は天国だった。相性はとてもよかった。息の合った同志であり、理解し合える相手であり、鏡に映った自分のようなものであった。一卵性双生児のように精神が感応しあった。一緒にいるだけでウキウキと楽しい気分になれた。いくら好きでも、ずっと一緒にいると飽きてしまう人もいるが、羅美は違った。一人になりたいと思ったのは数回くらいしかない。

羅美には何でも話すことができた。二人でたあいのないことをしゃべったり、ゲームしたりする時間が好きだった。羅美の木漏れ日のような笑顔に接し、包み込むような声を聞くたびに心がワルツを踊る。思い入れたっぷりな眼差しを交わしながら、服装の色について議論したり、文学作品について意見を述べあったりする時など、他人にはそれと察することのできない身振りや溜め息が混じっていた。

傍から見ると和やかでない雰囲気もあるが、そのような場合でも文句がつけられないほど自然だった。遠慮なく口論している時でも、そこには辛辣さも怒りも混じっていない。美女は何を言っても、どんな仕草をしても魅力的だった。羅美が微笑する度に望琉は喜びに酔いしれた。

羅美の表情はきつめで、タフであろうとしている。しかし、その見せ掛けの下には誰より優しい心を持っており、一緒にいると面倒見が良くて頼りがいがあった。いつも傍にいて世話を焼いてくれた。夜もなく昼もなく心配してくれた。優しく慰められるほど、羅美が女神に思えた。ジェンダーに囚われた時代遅れの人間ならば情けないと嘆息するかもしれないが、優しい姉としてたくさん甘えていた。

「姉のように守ってくれる人がほしかった。そういう人が必要なのです」

その羅美から追い出されてしまった。望琉にとって死刑宣告にも等しい。羅美と一緒にいなければ、たとえ宝くじの一等に当選したとしても何になろう。世界中の人間がひれ伏したとしても、羅美がいなければ望琉にとっては無価値だった。羅美を愛し、愛される人こそ幸福である。その幸福な生活が突然終わってしまった。

羅美からはたくさんのもをもらった。愛や夢、喜びそして命と数え切れない。何一つ恩返しできず、お礼も言えないまま終わってしまった。自分の愛が足りなかったのか。子供が火遊びをするように愛と戯れていただけだったのか。

二人は元々、生まれた場所も育った環境も違い、年齢差もある。むしろ、これまで一緒にいられたことを恩寵と思うべきかもしれない。恋というものは甘い幻に過ぎないのかもしれない。それでも、それを失うのは命を失うことに匹敵する場合もある。

望琉は全身の神経が震えるような溜め息をつき、開かれない扉に向かって一礼し、冬の街をトボトボと歩いていった。涙の滴るにまかせた後、やがて涙も乾いた。風がビュウビュウ吹いて、望琉の心をなでていった。苦悩が胸を締め付け、思わず喘ぎ声を発した。絶望

という言葉は今の望琉の状態を指していた。愛されていると信じ、幸福の絶頂に到達すると思っていた矢先、失意のどん底に転落していた。

様々なことが頭に浮かび、何かを思うと途端にその何かが現れる。何でもない羅美との会話の一語一語が磨かれた宝石のように貴重に思えた。望琉の心の中には二人で過ごした何でもない時間が砂金のように輝きながら積もっていた。

羅美への激しい恋心が自分の胸に忍び込んできた日を呪うべきだろうか。しかしそれはできなかった。幸福な日々がビデオを再生するように頭の中にくっきりと明滅していた。胸の思いには、一つとして追憶でないもの、愛惜でないものはなかった。

望琉は秋の日暮れのような表情をしていたに違いない。おまけに雨まで降りそうだった。心の中からは色々なものが剥落していき、大きな穴ができてしまった。あるべきものがそこにはなく、やるせない穴がぽっかりと開いている。望琉はその穴に呑み込まれてしまった。

そこは異世界だった。高く聳え立つ峰が天に伸び、山脈は遠くまで連なる。大気の密度は濃く、木の葉に埋もれた、湿った土の匂いで満たされていた。木の梢に雲がかかり、薄霧の中から時折、猿の鳴き声が聞こえてくる。黒い蔭が足に絡まっていた。

ふと気づくと、両脇に二人の少女が立っていた。望琉は二人が近づく気配を全く感じる事ができなかったが、とにかく彼女達はそこにいた。彼女達がちょうど立っている間に望琉が現れたのかもしれない。

少女は一四、五歳くらいで、双子のようにそっくりだった。背は低く一五〇センチもないようだ。素朴で素直かつ無邪気そうな女の子である。夏の高原の光が結晶したように生き生きとしていた。大地からすくくと生えている若い木々にも似た、健やかで爽やかな感じがした。美人というより、かわいいというタイプで、表情が豊かだった。笑顔は咲きこぼれる花のようであり、特に愛くるしい黒い目は思わず引き込まれてしまう魅力を持っていた。山の中ではありえないような華美な服装をしていた。

「女王様がお待ちです」

二人のうちの一人が言った。その口調は穏やかで、生まれてこのかた声を荒げたことなど一度もないのではないかと思われた。二人は望琉を山頂の方へ案内していった。望琉は羅美に絶縁されたショックが冷めず、眼前の不思議な世界に驚く余裕すらなく、言われるままに導かれた。

三人は何時間も山道を歩いた。この世界は機械文明からは離れた世界のようにであった。都会の幾何学的な建物ばかり見ている目は自然が溢れている場所へ来ると、どの一角を眺めても心が洗われる心地になる。特に打ちひしがれた望琉にとって自然の風景は心の洗濯になった。

山肌に生い茂る緑の灌木の合間には灰色の直方体の岩が乱立しているのが垣間見えた。階段状に山肌に立ち並ぶ直方体の岩石群は古代人の建造物のようにも、風化作用のいたず

れのようにも見える。

聴覚の面では最初にしたのは静寂であった。しかし感覚を研ぎ澄ませるとそれが誤りであることがわかる。石が一つ一つカタカタとなる音、ゆっくりと吹きぬける風の囁き、地面を這い回る虫の足音などである。

歩き続けると、暑くなってきた。汗が流れ、目にまで入ってくる。やかましいと思いつつ頭を左右に振ると、汗のしずくが飛び散った。口がカラカラに渴き、喉がひりひりと痛む。情けないことに日頃の運動不足がたたき、翌日は筋肉痛に苦しむことになる。

しかし少女達の身のこなしは優雅なままだった。汗ひとつかかず、テンポよく滑るように歩いていく。体育館の広い床を歩くように危なげがない。時には牝鹿のように軽々と草の上を飛び跳ねていく。立ち止まって待ってもらうことも一再ならずあった。

ようやく大きな城に到着した。中世ヨーロッパの城郭の趣であった。石造の城で、石の大半はくすんだ灰色だが、ところどころに濃紺色や朱色、黄土色といった菱形の石が嵌め込まれ、彩りを与えてくれていた。城壁の上には何本もの塔がそびえていた。塔の形は様々であった。円柱があり、角柱があり、ピラミッド型があった。

城門をくぐると庭園が広がっていた。形よく刈り込まれた木々の間を放射状に遊歩道が走っており、そこかしこに彫像が置かれ、小道の交わる場所には花壇がしつらえられて、周囲を樹木が囲んでいる。中央には噴水があり、女神やイルカの彫像で飾られた水盤から水が銀の幕のように流れ落ちていた。

「女王様は青の間でお待ちです」

二人のうちのもう一人が言い、城の中へ案内した。回廊はまばゆいばかりの光に輝いている。螺旋状に続くカラフルな通路を歩いていると、まるで巨大な巻貝の中をさまざましている気がした。階段を数えきれないほど上ってようやく部屋に通された。その部屋には壁いっぱい青の間の由来になっただろう金地と青の綴れ織りの掛け物が飾ってあった。

真ん中には明らかに女王とわかる女性が座っていた。その女性はトランプのクイーンのような服装で着飾っており、頭に金色に輝く王冠をかぶっていた。美人であるという以上に、全身からこぼれるような華やぎと知性のきらめきのようなものがあった。よい香りが漂い、高貴な気品に満ちていた。霊能者が見れば、目もくらむようなオーラを発光させていたかもしれない。

君主が人の上に立つのは、ただその持つ階級や権力ばかりではなく、その気高き心と不拔なる精神によるものであることを印象付ける存在である。超大国の大統領も経済大国の総理大臣も彼女の傍らでは色あせて見えるだろう。どこの女王か知らないが、そもそもここがどこかもわからないが、女王と崇め奉られる彼女から見れば、望琉など吹けば飛ばすような存在でしかないはずだった。

女王は入ってきた三人に対し、いかにも君主らしい一瞥を投げた。少女達は慎ましやかに目を伏せた。

「絶望した者よ」

女王が厳かに口を開いた。口調は荘厳だった。

「この者達のいずれかと結婚し、わらわの王国で安住するがいい」

女王は、望琉を連れてきた二人の少女を指した。目が合うと少女は顔を赤らめ、微笑んだ。望琉の心を揺るがせるにたる清潔な笑いだった。

「お言葉の意味がよくわかりかねます」

女王は冷たい眼差しで、じっと望琉の顔を覗き込んだ。

「わらわの侍女の一人と結婚し、わらわの王国で暮らせ、と言ったのだ」

女王は一語一語はっきりと区切りながら、ゆっくりと話した。

「お言葉ですが、女王陛下。私には心に決めた方がいます」

どこの国の女王なのか、そもそも本当に女王なのか証明するものは何もなかったが、女王の威厳は本物であることを望琉に教えていた。そのため、女王に対する敬意を払うことは忘れなかったが、主張すべきことは主張した。羅美に嫌われたとしても、他の人と結婚することは考えられなかった。

「そなたはその恋に破れ、わらわの絶望者の王国に辿り着いたのであろう」

哀れむような、宥めるような、不思議な口調だった。ぶつかりあった二人の視線がどれくらい長い間そこに凝固していたのか、望琉には思い出せない。女王の目からは、どこか悲しげな輝きがゆっくりと広がっていった。やがて女王は黒くて美しい瞳を閉じて溜め息をつき、再び目を開いた。

「仕方がない。森の小屋を与える故、そこに一人で住むがいい。今日はもう下がって宜しい」

許可を与える形での命令であった。こうして望琉は「絶望者の王国」の森にある小さな小屋に住むことになった。

望琉は二人の少女に案内されて森に入り、小屋に着いた。小屋の中は、目に見えない守護神が、新たに迎える住人の必要や望みを察していたかのように全ての用意が整えられていた。棚の上には飲み物、テーブルには本が置いてあり、花瓶には花がいけてあった。

望琉は花の香りを吸いながら腰を下ろした。静かであった。喧騒に溢れた都会の夜と違い、この夜は原始の静寂に満ちている。木々から放出される葉緑素の海を精霊達が密やかに泳ぎまわっているように思われる。

やがて望琉は深い夢に落ちていき、そのまま寝てしまった。翌日、望琉は質素な自室でひんやりとした朝を迎えた。木造の小屋は薄暗く湿っている。

望琉は小屋の外に出て周囲を見回した。ここでは色とりどりの草花が生い茂っていた。都会生活に疲れた心身を柔らかく包んでくれるような穏やかな自然に囲まれていた。しっとりした新鮮な空気を胸いっぱい吸い込むと、びっくりするほど多種多様な香りが鼻腔をくすぐる。ありとあらゆる香水と料理用ハーブを一つ残らず混ぜ合わせたような複雑な香りである。

ここには食用となる草や木の実も豊富だった。これは二人の少女から教えてもらったこ

とである。望琉は草や木の実を食べて生命をつなぎ、同時に草や木で社を立て、それを羅美に捧げ、羅美の幸せを祈った。

女性は現実的な生き物である。それは妄想にとらわれて夢を語る阿呆共よりもはるかに素晴らしいが、望琉が遠く離れた場所から溜め息をつき、微笑みかけ、ひざまずいたとしても、それが羅美にとって何の役に立つだろうか。遠い目をした詩人顔で運命の悪戯に思いを馳せても、目の前の現実が一変するわけではなかった。それでも望琉はせずにはいらなかった。羅美の温もりを思い出すほど、感謝の気持ちで胸が一杯になった。

女王は望琉の純粋な愛に感動した。

「それほど愛しているならば、そなたの世界に戻すこともできるぞ」

「ありがとうございます。しかし私は羅美に嫌われてしまいました。羅美にあわせる顔がありません」

「それならば、わらわの魔力でそなたを女性に変身させよう。別人ならば会っても構うまい」

女王は魔法の杖を私に向け、呪文を唱えた。すると望琉は女性になった。

「そなたは女性となった。さあ、行くがよい。そなたが他人に自分の正体を告白すればこの魔法は解けることを忘れるな」

瞬きすると望琉は、羅美の住む街に戻っていた。街は昔と何も変わっていなかった。こちらの世界と向こうの世界では時間の流れが違うようである。

羅美にはすぐ会えた。ショートカットとセミロングの中間に位置する長さの髪で、輪郭のくっきりした顔立ちに、夏の高原の風が吹き渡るような雰囲気を漂わせ、足取りは颯爽として律動的である。ジャケットとスカートとブラウスの組み合わせが、ファッション雑誌のカラーグラビアのようであった。ありふれた服装であっても、着る者によっては宮廷の礼服以上に豪奢に見えることがある。

羅美の眼差しから漂い出る微笑が、望琉の心を優しく包む。こうして向き合い、笑顔を見、話を聞くことができるだけで、胸が詰まるほど嬉しかった。話したいことが次々と生まれ出て、歓喜を伴った熱い流れをつくり、望琉の胸で溢れかえった。

望琉は羅美と友達になった。羅美と一緒にいることがあまりにも自然なので、再会のめども立たず、離れ離れになっていた期間が夢のように思われるほどであった。

しかし、羅美が友情を感じてくれる度に、望琉は羅美を騙していることから良心の呵責を感じた。望琉の視線が羅美と合うと、羅美は身振りで感謝と賞賛の気持ちを示してくれる。望琉は胸が締め付けられるような思いを微笑の陰に隠して、同じ仕草を返した。

しかし遂に苦しくなって羅美に自分の正体を告白してしまった。望琉は瞬時に昔の男の体に戻っていた。

「騙していたことを誤ります」

望琉は率直に謝り、羅美の足元に跪いた。一人の女性とかつて女性であった者の女の視

線が交差した。その唇から漏れるに違いない羅美の心を聞き取ろうとして、望琉は耳を傾け続けた。沈黙は永遠と思われるほど長かった。

羅美の目には松明の火が燃え上がった。いや、溶岩がたぎっていたと形容した方が適切だろう。羅美が激怒しているのは明らかだった。腹を立てた、という表現では控え目過ぎるくらいだった。望琉は身震いした。恐怖と後悔により心臓が両側から握り潰されそうであった。

「お前は卑怯者だ。私が裏切りを許さないことを知らないのか」

「これも羅美に会いたい一心でしたことです。私の情熱を受け止めてください」

「それにしても、けち臭い小細工が目にあまる」

「全ては愛のなせる業です」

「言っていて恥ずかしくないのか」

「恥ずかしいです」

「お前のような男は死んでしまえ」

目を見張った羅美の体から、すさまじい情熱がほとばしり出て望琉の胸を突く。望琉は急所に一撃を受け、全身の血が胸いっぱい溢れるのを感じた。望琉の目の前に降り立つかに見えた羅美は、瞬く間に手の届かない存在になった。もはや死ぬしかないのか。もとより羅美のいない人生には楽しみはない。そして再び絶望者の王国に落ちていった。

絶望者の王国は冷やかな静けさに包まれていた。遠くの森から風に乗って伝わってくる鼻の音が途切れ途切れに夜の底を揺するばかりである。

人間が行くと必ず食べてしまう竜の棲む愛の真実の泉に、竜に食われるために行く。ところが竜は食べない。この竜は真実の愛を抱く人は食べない。羅美も本当は望琉が好きなので、追いかけてくる。

望琉は羅美がやって来たことに驚きながらも、嬉しくて目配せする。しかし羅美はそれに気づいたのか、気づかなかったのか、顔を向けようとしなかった。特急列車が無人駅を通過するような態度だった。望琉は血も凍りそうになった。嫌われたとはいえ、これほど無関心な態度を示されるとは思いもよらなかった。恋焦がれている男にとって無視されることほど辛く切ないことはない。

羅美も食べられない。そこへ女王が現れた。

「二人は神託によって結ばれる運命にある。もう意地を張らなくてもいいだろう。わらわが二人を結婚させよう」

望琉の顔は輝いた。

「ゆっくり話し合おう。羅美には私の不甲斐なさを責める資格がある。その後で……」

しかし羅美は悲しそうに首を振った。

「私は相手を許すことができないの」

流麗な抑揚と独特の発音が、やさしいこだまをひきながら望琉の心に浸透する。

「不幸な人間をこれ以上、苛めないで下さい」

望琉は憐憫を求めた。羅美は意思の強さを感じさせる、引き締まった唇をわずかに緩めた。

「私が耐えられないの。時には急に態度を一変して、自惚れで膨れ上がった恋人に一発ガンと食らわせるようなことをしないと身が持たないのよ」

「許さなくてもいい。怒ってもいい。でも一緒に居させて。これから先、私の住まいはあなたのいらっしゃるところ以外にはないのです」

羅美の眼差しは少しずつ優しくなっていた。それは望琉にとって柔らかな布を重ねるようにして更けていく秋の夜のようにであった。どこまでも深い羅美の心、底が計り知れない。静かな中に満ち溢れている知恵……。

羅美は恋人に対してするのと同じようなやり方で、望琉の手を握り締めた。初めて羅美の手を触れた時の暖かい感触が望琉の脳裏によみがえった。望琉は全身をわななかせた。何とも言えない暖かな気持ち、満ち足りた、恵まれた思いが胸に戻ってきた。

望琉の血管に戦慄が走り、動脈が踊りだすのを感じて、羅美は心から愛されていることを理解した。二人の気持ちは離れたことがなかったかのように合わさった。二人が驚きを通り越し、恐れすら感じるほどぴったりと。

望琉にはこれからやりたいことがたくさんあった。それには羅美がいてくれれば十分だった。そして、それら全てを羅美と一緒にやりたかった。羅美と共に未来という名の芳醇な世界に分け入り、思う通りの収穫を上げる。それは自分達二人の権利であると望琉には思えた。